【32用　語】

【乍恐：おそれながら】訴願書などを役所に差し出す際に使われた慣用句。恐縮ではありますが、恐れ入りますが

【立願：りつがん】「りゅうがん」とも読む。神仏に願をかけること

【参宮：さんぐう】神社に参詣すること、とくに伊勢神宮に参ること

【出立：しゅったつ】旅に出ること、出発

【暇：いとま】「ひま」とも読む。仕事の合間、すきま、職をやめること、離縁すること、休暇

【向領：むかいりょう】前橋藩酒井氏の所領区分の一つ。前橋城下から利根川を隔てた西方、総社町を中心とする地域の呼称。

【32解　説】

江戸時代に入ると伊勢神宮の御師（おし・おんし）による広報・勧誘活動が盛んとなり、全国各地に「伊勢講」（代参講の一つ、講中の人が銭を積み立て、伊勢神宮へ順番に参拝した）が成立し、多くの庶民が一生に一度は伊勢への参拝を志すようになった。上州では主に伊勢外宮の御師がたびたび廻村し、御初穂料を集めて伊勢暦や御札を配ったり、神宮への参拝（伊勢参宮）を勧誘していたことが「村入用帳」などの記述からもうかがうことができる。

本文書は当時、前橋藩酒井氏の所領であった群馬郡元惣社村の年齢が十代から三十代の男五人が伊勢神宮へ参拝することになり、村役人が連名で前橋藩の向領代官役所に提出した御暇願いの控えである。期間は、農閑期の正月十二日から翌二月十二日の一か月間としているが、帰路は京・大坂・奈良などに立ち寄ったり出されることもあったようである。帰国が遅れて延長願いが